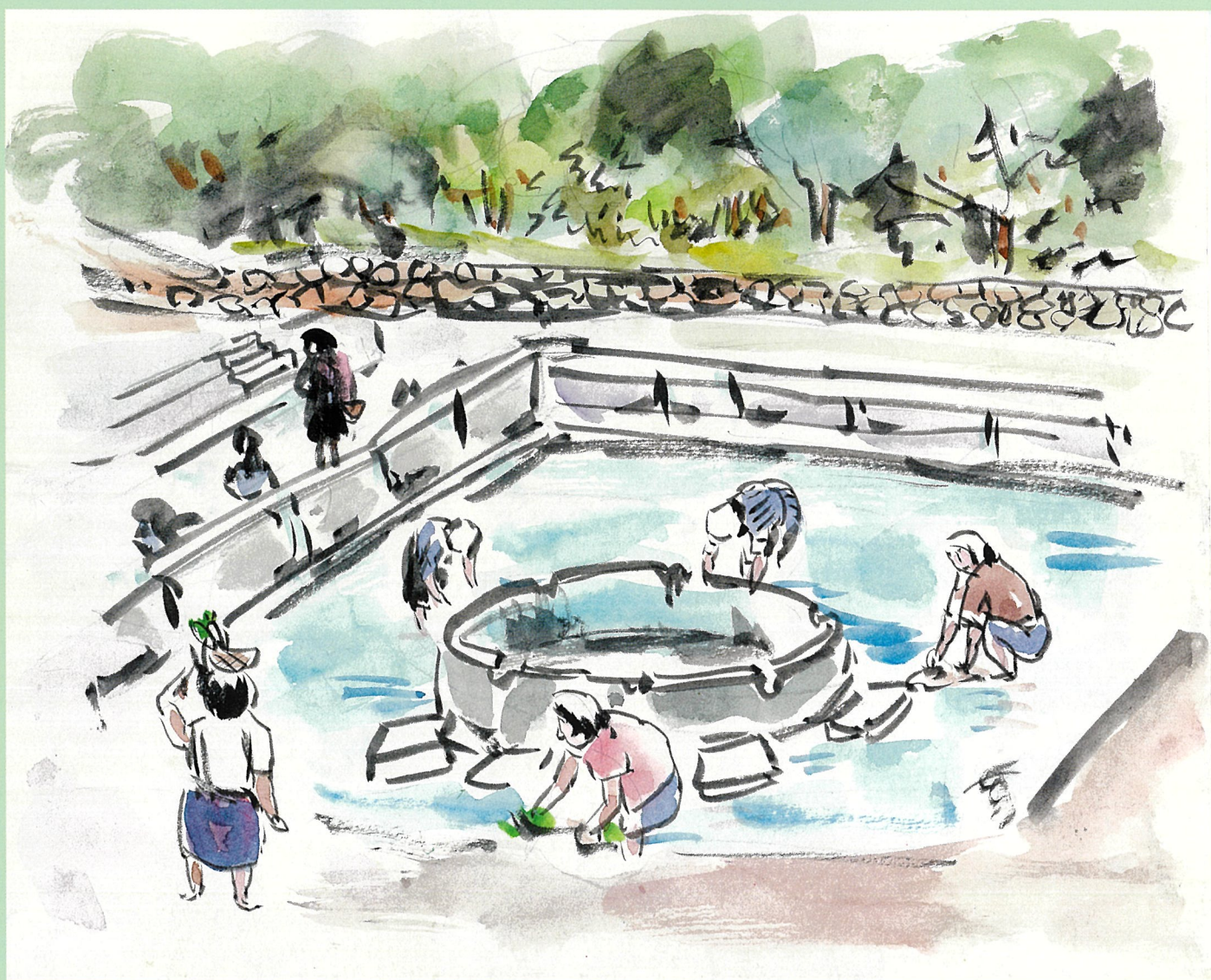


金武町文化財調査報告書 第2集

金武町の井泉

— 水をめぐる人々のくらし —



2003年

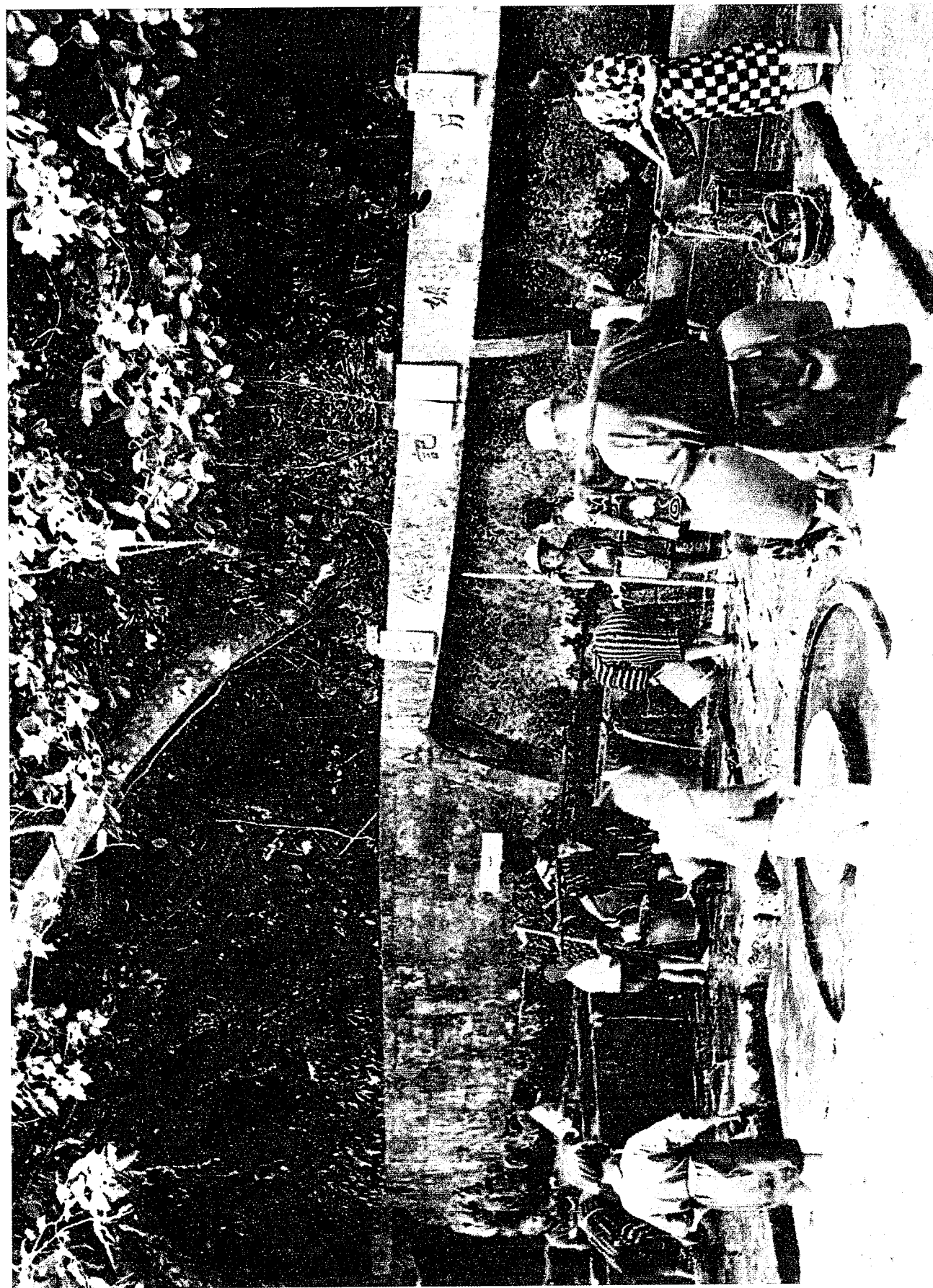
金武町教育委員会

金武町の井泉

— 水をめぐる人々の暮らし —

2003年

沖縄県 金武町教育委員会



水道がなかった頃の かつての大川

発刊に寄せて

金武町教育委員会
教育長 比嘉邊利

本町教育委員会では、過去に文化財保護行政の一環として金武町の文化及び文化財に関する報告書をいくつか纏めてきた。

次の通りである。

『金武町の遺跡』—遺跡分布調査—1990年

『金武町の村落と聖地』—伊芸区の場合—平成3年

『金武町の村落と聖地』—屋嘉区の場合—平成4年

『金武町億首川マングローブ調査報告書』—1993年

『金武町の村落と聖地』—金武区と並里区の場合—平成6年

『金武町乃指定文化財』—平成6年

『金武町海岸植物調査報告書』—平成8年3月

それ以後中断していたのであるが、今度町全域の「水」に関する報告書ができあがりました。

水栓をひねれば水が出てくるような今日、過去の水をめぐる生活は想像できにくくなっている。

金武町内の「カー」の調査をすることによって、地域の人々の過去の水をめぐる生活（＝文化）を明らかにすることは意義深いものがある。

それぞれの集落の地勢・地形・地質によってカーの形態も水量も違い、水に関わる生活の違いも明らかになった。

本書を通して町民の皆様が「水」、あるいは「カー」のことに関心を寄せ、過去の「水」をめぐる生活に思いをいたし町民憲章が掲げる「香り高い文化の町」へ発展する契機になれば幸いである。

平成15年3月

は し が き

金武町文化財保護審議会
会 長 池 原 隆

「水」は、人間はもとよりすべての生物の命の源泉である。

40年ほど前までは、人々は生活の水を確保するために苦勞した。

家庭で使う生活用水は、そのほとんどを「カー」にたより人力で担ぎ上げてきた。現在50代以上の人々には記憶に残るところである。

朝の水汲みは子どもたちの日課であった。水をめぐる問題は上水道の所轄、農業用水の所轄と一緒に考えることも必要であるが、本調査では水の文化的側面を中心に調査を展開した。

一年で、町全域を調査することは成果としては不十分な点があるが、今後に期待したい。

「カー」の形態がいくつかに分類されることは想像していなかった。その違いは主に地形、地勢、地質によるものである。

また、「カー」ということばの概念を考える契機となった。

文化財保護行政の目的は、おおまかに言えば地域の文化を調査し、護り育てそれを価値あるものとして、住民に知らせることである。

特に重要と思われるものについては、町指定の文化財として保護指定をしている。

現在、町指定の文化財として保護指定されている「カー」は四カ所（四件）である。

ウフカー（屋嘉）・ウッカガー（並里）・キンタガー（並里）・ナコーガ（中川）以上。

それ以外にも多くの「カー」が生活用水を得るために、人々に親しまれ利用されてきた。

このような調査の成果は将来、開館するであろう博物館活動に活かされるべきものである。

平成15年3月

目 次

グラビア

発刊によせて 教育長 比 嘉 邊 利

はしがき 文化財保護審議会長 池 原 隆

目 次

凡 例

1. 調査にあたって	7
2. 金武町の概観	8
(1) 金武町の地形・地勢・地質	8
(2) 金武町の字と区	8
(3) 金武町の主な川	8
(4) 金武町の土地分類スケッチ	10
3. 調査票	12
(1) 調査票一覧	12
(2) 調査票	14
4. 中川、金武・並里のカー	64
(1) 中川区のカーと水を取りまく状況	64
(2) 金武・並里の地形・地質とカー	65
(3) 金武区の谷すじのカー（嘉陽層のカー）	66
(4) 金武・並里のカーウガミ（井泉拝み）	67
5. 伊芸のカー	68
(1) 伊芸のカー	68
(2) 伊芸のカーメー（井泉参り）	69
6. 屋嘉のカー	70
(1) 屋嘉のカー	70
(2) 屋嘉の個人用井戸	70
(3) 屋嘉のカーと祭祀	71
7. カーをめぐる雑編	72
(1) 民俗芸能・民話・伝承とカー	72
(2) 並里のカーの管理	74
(3) イーチ（池）・クムイ（小堀）	75
(4) カーとスンジャ（井戸）とタンク	75
8. 地図	76
9. 調査を終えて	83
参考文献	85

凡 例

- 調査の対象とした時期は、おおむね戦前から各部落に簡易水道ができるまで（1960年頃）とした。
- 調査の範囲（単位）は、それぞれの部落ごととした。
金武・並里は一つの範囲（単位）とした。
- 金武・並里の共同井戸（スンジャ）は、固有名詞はないが括弧付きで□□前、□□の側とした（金武・並里の人々にとって場所が特定しやすい）。
- 伊保原組・喜瀬武原組・開開懇^{ひらきかいこん}・「金武・並里」の個人井戸及び戦後の各区の共同の水道については、調査が充分でないため一部を除いて本報告書には掲載していない（この件は、将来調査をして補遺として世に送ることを期待する）。
- 「カー」を井泉（セイセン）と宛てたのは古くは井戸のことを言い、村内法でもそのように表記されている。
- 金武・並里では井戸のことをスンジャと呼んでいた。
票では「豎掘りの井戸（スンジャ）」などと記した。
- 中川の地図に㊦としてあるのは、地域の人々が「ワク」と呼んでいるきわめて小さい泉（並里でいう「イジュミングワー」か、それより小さい規模）のことを指す。

1. 調査にあたって

金武町は水の豊かな地域というイメージが強かったように思う。それは沖縄有数の水量を誇る大川の印象によるものであろう。現実はいかなるものであったか。

本調査は、平成5年に行われた金武・並里両区の「字金武のカー」の合同調査に抛りながら「カー」をめぐる生活について町全域にわたって行ったものである。

「カー」を調査することは、人々の水にかかわる生活（＝文化）を調査することである。

概ね、次のようなことを調査した。

- | | | | |
|-----------|------------|----------------|--------------|
| ①名称 | ②所在 | ③現況 | ④周辺の状況 |
| ⑤形態 | ⑥地質 | ⑦地勢 | ⑧地形 |
| ⑨年中行事 | ⑩人生儀礼 | ⑪部落の祭祀 | ⑫ムンチュ（門中）の祭祀 |
| ⑬家内の拝み | ⑭イーチャー、クムイ | ⑮民俗芸能・民話・伝承とカー | |
| ⑯水にかかわる道具 | ⑰カーの管理 | ⑱スンジャとタンク | |

上記のことがらを調査することによって、それぞれの地域が水を通してどのような生活を送り、どのように人生や、とりまく世界を考えていたかを考えるよすがとしたい。

金武町は明治期から風俗改良運動が盛んな地域であった。金武町のそれぞれの部落の祭祀はすでに絶えて久しい。

ムンチュ（門中）のレベルの祭祀も盛んであるとはいえない。そのような状況での調査である。

「カー」をめぐる毎日の生活は、日常としてカーに近い人たちは体験した当時はさほど不便なものとも感じなかったかもしれない。水道の普及した今日から考えればよくあのような生活ができたものだという感慨が湧いてくる。もちろんカーに遠い人たちは水を汲みあぐねて苦勞している。

2. 金武町の概観

(1) 金武町の地形・地勢・地質

沖縄本島は、北北東から南南西へのびている。

北部はその中央部を脊梁山脈が走っている。金武町の脊梁部は北からティーチュダーキ・ティーダーキ・ブートウダーキ・ジャフンダキ・ウンナダキ・ヤカダキと続いている。

金武・並里・中川の部落は、ほぼその山裾の台地に立地している。

伊芸と屋嘉の部落は浜堤に立地している。それぞれ恩納岳、屋嘉岳に抱かれた集落である。

並里区の集落地域（上村渠・前村渠）及び金武区の仲間村渠は、石灰岩に立地し、金武区の京村渠は嘉陽層の上にある。

中川の部落はほぼ嘉陽層の上にある。

町全域が金武湾に面し、山を背に、前に海を見るという集落立地である。伊計島・宮城島・平安座島に風浪がさえぎられ、比較的緩やかな海で冬は暖かい。

(2) 金武町の字と区

字金武（中川区・並里区・金武区）

字伊芸（伊芸区）

字屋嘉（屋嘉区）

(3) 金武町的主要な川

中川……ナコーガ（名古川〔上流はウルンガー〕）

並里……ウククビ川

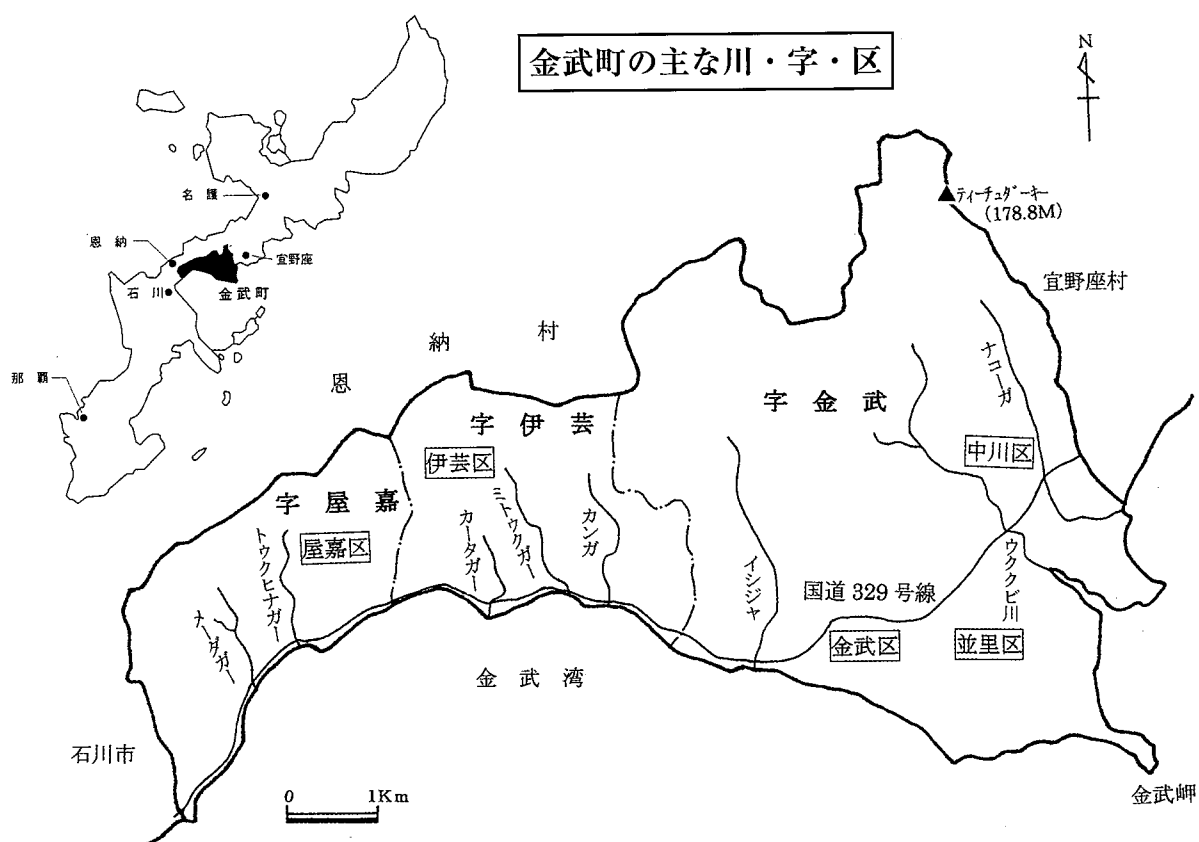
金武……イシジャ（石川）

伊芸……カンガ（鴨川）・ミトゥクガー（美徳川）・カータガー（川田川）

屋嘉……トゥクヒナガー（渡久比那川）・メーダガー（前田川）

※ 中川のナコーガ、伊芸のミトゥクガー・カータガー、屋嘉のトゥクヒナガー・メーダガーは生活用水として利用された。

金武町の地勢



(4) 金武町の土地分類スケッチ

地 域 (原) 名	地 質
フックワ・スルジ	泥がちの堆積物
ン タ バ ル	
伊 芸 の 田 ん ぼ	
屋 嘉 の 田 ん ぼ	
億 首 側 流 域	泥がちの堆積物 (フックワ・スルジバル)
金 武 ダ ム 一 帯	泥がちの堆積物
福 花 の 海 岸	砂がちの堆積物
大 兼 久 原	
メ ー バ ル 海 岸	
先 謝 原 海 岸	
伊 芸 の 集 落	砂がちの堆積物 (浜堤・海岸砂丘)
屋 嘉 の 集 落	
金武区の集落の北半分	琉球石灰岩
並里区の集落の北半分	
ギ ン バ ル 一 帯	嘉陽層
イチバル・双頭原	石灰岩質砂岩、礫岩
長 地 原 一 帯	石灰岩質砂岩 (湿地堆積物)
浜 田 原	琉球石灰石
先 謝 原	砂岩 (嘉陽層)
西 先 謝 原	
中 川 原	
名 古 川 原	
志 那 田 原	
木 登 代 原	
幸 地 原	
喜 瀬 武 原	
波 武 謝 原	
波 津 附 原	
羽 佐 間 原	湿地堆積物、砂岩
島 兼 原	砂岩 (嘉陽層)
前 原	
塩 汲 原	

地 域（原）名		地 質
西 塩 汲 原 京 村 渠 渡 慶 頭 原 伊 保 原 犬 盛 原 平 川 原		砂岩（嘉陽層）
伊芸、屋嘉の山		千枚岩（名護層）
屋 嘉	伊 地 田 原	琉球石灰石
	前 袋 原	
	渡 久 比 那 原	
	喜名又原の一部	
	嘉 喜 又 原	石灰岩質砂丘
伊 芸	クラシ原の一部	琉球石灰石
	上 島 原 一 部	石灰岩質砂丘
	後 原	
伊芸・屋嘉の浜堤		砂がちの堆積物

『土地分類図（沖縄県）』

S 52. 国土庁土地局（1：125,000）参照

3. 調査票

(1) 調査票一覧

I. 中川区 II. 金武区・並里区 III. 伊芸区 IV. 屋嘉区

区 分	名 称	字	小 字	備考	ページ
I-1	不 詳	金武	志 那 田 原	中川区	14
I-2	ナコーガ	〃	名 古 川 原	〃	15
I-3	ギンバルガー	〃	源 原	〃	16
I-4	ティカジャー	〃	頭 呂 地 原	〃	17
II-1	不 詳	〃	灘 原	金武区	18
II-2	不 詳	〃	浜 田 原	〃	19
II-3	タマタグチ	〃	浜 田 原	〃	20
II-4	ナッコーダ (ガ)	〃	浜 田 原	〃	21
II-5	マイニングワガー	〃	西 塩 汲 原	〃	22
II-6	タチミチ	〃	西 塩 汲 原	〃	23
II-7	シマンガ	〃	西 塩 汲 原	〃	24
II-8	ジョーガー	〃	塩 汲 原	〃	25
II-9	ミーガー	〃	塩 汲 原	〃	26
II-10	ティーダガー	〃	塩 汲 原	〃	27
II-11	ナーカヌカー	〃	塩 汲 原	〃	28
II-12	ウガミヌカー	〃	御 嶽 原	〃	29
II-13	なし (クブフクジングワの前)	〃	西 塩 汲 原	〃	30
II-14	なし (アブントの隣)	〃	京 村 渠	〃	31
II-15	なし (アタイの前)	〃	京 村 渠	〃	32
II-16	なし (サンジョングワの前)	〃	後 村 渠	〃	33
II-17	なし (カララの隣)	〃	後 村 渠	〃	34
II-18	なし (ウチンダカリ)	〃	後 村 渠	並里区	35
II-19	なし (マヌフスカの隣)	〃	後 村 渠	〃	36
II-20	なし (メージングワの隣)	〃	呉 屋 原	〃	37
II-21	なし (ンダトゥマシチャの前)	〃	仲 村 渠	〃	38
II-22	アナガー	〃	後 村 渠	金武区	39
II-23	テーラガー	〃	大 川 原	〃	40
II-24	ウッカガー (大川)	〃	大 川 原	並里区	41
II-25	ヌンドウルチガー	〃	仲 村 渠	〃	44
II-26	イジュミングワ	〃	佐 久 本 原	〃	45
II-27	キンタガー (慶武田川)	〃	東江村渠・慶武田原	〃	46

区 分	名 称	字	小 字	備考	ページ
Ⅱ－28	カングラー	金武	東 江 村 渠	並里区	48
Ⅱ－29	サーガ	〃	福 花 原	〃	49
Ⅱ－30	クーランチャヌモーイジュミ	〃	福 花 原	〃	50
Ⅱ－31	タキシヌイジュミングラー	〃	田 慶 志 原	〃	51
Ⅲ－1	ウブガー	伊芸	上 島 原		52
Ⅲ－2	ヤングマタガー	〃	上 島 原		53
Ⅲ－3	不 詳	〃	上 島 原		54
Ⅲ－4	不 詳	〃	上 島 原		55
Ⅲ－5	不 詳	〃	上 島 原		56
Ⅲ－6	インジミー	〃	上 島 原		57
Ⅲ－7	不 詳	〃	上 島 原		58
Ⅲ－8	不 詳	〃	シ ッ チ 原		59
Ⅳ－1	ユンダガー	屋嘉	上 福 地 原		60
Ⅳ－2	不 詳	〃	前 袋 原		61
Ⅳ－3	ウフカー	〃	村 内		62
Ⅳ－4	メーダガー (メーダウツカイ)	〃	前 田 原		63

(2) 調査票

名 称	No.	不 詳		
	I - 1			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武 (中川区)	シ ナ ダ バル 志 那 田 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状態	
谷筋を掘り、コンクリートの堰を作っている。	嘉陽層	放 置	高速道路の下方100mのウルンガーの支流にある。ウルンガーには、洗濯や水浴をしたと思われる石積みや堰がある。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
		付近の人々の水汲み場		
備 考 戦前の開墾時代に掘られたか、戦後掘られたカーか判然としない。 ウルンガーの水場の石積みなどから考えると、かなりの人々が使ったと思われる。 建設課の道路計画があるようである。				
				

名 称	No.	ナコーガ		
	I - 2			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（中川区）	ナ コー ガ バル 名 古 川 原	1 0 4 0 8	
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
堀り込み	嘉陽層	使用せず。 かつては、農地の中にあったが、付近に家が建ちつつある。	土手の下を掘ったカー。 ギンバルの部落東北に位置し、おおむね250m以内に部落はある。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
備 考		ギンバルのウブガー。若水もここで汲んだ。 クニガミカタアガリスクミチ 国頭方東宿道に隣接し旅人が手足を洗い、ノドを潤した。		
		野菜、イモを洗う場所が下にあった。子どもらの遊ぶ場所でもあった。 若水、ウブミズをここから汲んだと言う人がいるし、ギンバルには、それはなかったと言う人もいる。 ムーアレガー（芋洗い）と言う人もいた。		
金武町指定文化財 記念物・遺跡 昭和3年生のNHさん は言う。洗濯はこことサラバに行った。若水はここで汲んだ。他市町村の避難民が水の「グウン（ご恩）」と言って拝みに来る。カーウリーもここに来た。 男の子が生まれたら、女の子を連れ、女の子が生まれたら、男の子を連れ、サンを持たしビンの一杯水を汲んできて、赤子の額に3度つける。健康に育つようにということであった。				

名 称	No.	ギンバルガータ		
	I - 3			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（中川区）		ゲン 源 バル 原	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
自然流水		石灰岩	土地造成により消滅。	石灰岩の窪地、ギンバルの部落から少し離れたハル。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
平成14年の旧正月には、拝まれた跡があった。			戦争中、金武・並里と中南部からの難民が、この水を利用した。	



名 称	No.	ティカジャー		
	I - 4			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（中川区）	ス 頭	ル 呂	ジ 地
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
自然流水	石灰岩		排水路を作って塞がれている。	石灰岩のムイと頭呂地原の田と畑が広がり近くをウククビ川が流れる。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
 備考 渇水期にはギンバルの人たちはここまで水を汲みにきた。戦争中、ギンバルに避難した人々はこの水を使った。 				

名 称	No.	不 詳			
	Ⅱ－１				
所在地	字		小 字		地 番
	金武（金武区）		ナダ 灘	バル 原	
形 態		地 質		現 況	周辺の状況
自然流水		石灰岩		使用せず。	崖下のワク。 前には田圃がある。 数年前まで田芋が作られていた。 田圃の前は海岸で、 レッドビーチの施設がある。
信仰との関わり				水道が設置される前のようす	
				水田用水	



名 称	No.	不 詳			
	Ⅱ－２				
所在地	字		小 字		地 番
	金武（金武区）		ハマ ダ バル 浜 田 原		
形 態		地 質		現 況	周辺の状況
自然流水		石灰岩		使用せず。	石灰岩の崖下から湧き出してくる。２か所のワクがある。その南が田になっていて平成７～８年まで田芋が栽培されていた。 小字浜田原の由来はここにあると思われる。
信仰との関わり				水道が設置される前のようす	



名 称	No.	タマタグチ		
	Ⅱ－３			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	ハマダバル 浜 田 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
・サークの土手を堀り込んだカー。 ・自然流水	嘉陽層	カーの近くまで埋め立てられ、ゴミ捨て場になっている。放置されている。	タマタの名前が示す通り二またの川筋の近くにある。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
香炉は置かれているが、拝まれているようすはない。		水量が豊かで銭湯の用水や、もやしの栽培にも使われていた。 アタイのスンジャを利用していた人たちは、渇水期にはここまで水を汲みにきた。洗濯、水浴、谷筋の水田用水として利用された。 水質が良かった。 日常の水を汲む。 サークの傾斜に堀られて、コンクリートで囲われたカーと、谷の底のタマタの付け根あたりに大きなワクがあった。		
				

名 称	No.	ナッコーダ (ガ)		
	Ⅱ－４			
所在地	字		小 字	地 番
	金武 (金武区)		ハマダバル 浜 田 原	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
土手を掘り込んだカー。		嘉陽層	使用せず。	畑の中にある。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
年に数回拝まれている。			・ 飲料水	



名 称	No.	マイニングッガー		
	Ⅱ－５			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	イリ ウス クミ パル 西 塩 汲 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
谷筋を掘ったカー	嘉陽層	使用せず。	近くまで埋め立てられ、土砂が流れ込んでいる。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
香炉がある。		京組で金を出しあって、大正７・８年頃、メーウクダのじいさんが掘り下げて大きくした。その時に洗濯場も作った。それまでは小さすぎて水争いがあった。 ・ 他のカーよりおいしい水だった。 ・ 頭にカメを載せて運んだ。		
備 考 ・ 古いカーである。 ・ 「マイニングッガー」という屋号の家が近くにある。 ・ 洗濯場と水汲み用は、１０m程離れていた。 ・ 女の人が、水ガメを頭に載せやすいように石の台があった。 カーの脇に、水運搬用のカメが半分埋め込まれている。				
				

名 称	No.	タチミチ		
	Ⅱ－6			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	イリ ウス クミ バル 西 塩 汲 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
谷間の根もとを掘ったコンクリートのせき。	嘉陽層	放 置	かつては農地であったが、放置されている。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
		・ 洗濯、水汲み、水浴。 ・ 内組の人々が使った。		
備 考 比較的水量が多かった。渇水期にも枯れることはなかった。				
				

名 称	No.	シマンガ		
	Ⅱ－７			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（金武区）		イリウスクミバル 西 塩 汲 原	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
谷筋を掘ったカー		嘉陽層	ヒューム管を通し、 埋められている。	谷筋は埋められて、 平坦になっている。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
			・ タクシ組の共同カー（２０世帯くらい）。 ・ 水量は少なかった。 ・ 周りは、田んぼだった。 ・ 湧き水で、きれいなおいしい水だった。 ・ 雨が降ると、川の水が入って汚れた。	

名 称	No.	ジョーガー		
	Ⅱ－８			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	ウスクミバル 塩 汲 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
谷筋を堀ったカー。	嘉陽層	放置されている。	ミーガーに隣接しているジョーガーが先に堀られ、ミーガーが後に堀られたカーか。 谷の底といった場所。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
		・ 小さなサークダーの水源。 ・ 子供の頃、谷間の流れで水浴をした。		



名 称	No.	ミーガー		
	Ⅱ－9			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	ウス クミ パル 塩 汲 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
谷筋を掘ったカー	嘉陽層	放置されている。 水量は十分のようである。	カーに通じる里道がある。 ナーカヌカーあたりから細流がある。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
香炉はあるが、拝まれているようすはなかった。		・ 水汲み。 ・ ウチワ一の田んぼがあった。 ・ 水浴び。 ・ 洗濯。		

名 称	No.	ティーダガー		
	Ⅱ－10			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	ウス クミ パル 塩 汲 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
谷筋を堀ったカー	嘉陽層	クバの木が多数生えている。水は涸れている。	一帯、クバが生えていた。 現在の樹林は太平洋戦争以後のものである。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
・ 金武、並里のムンチュ、チネーが拝む。 ・ 正月に水分を含んだ土を持ってきて、豆団子にしてミンナデをしたという人がいる。		カーとしての利用はあまりなかった。		

備 考

ティーダガーは、そこを水源として利用したという話は聞かない。信仰の対象として金武・並里の主なムンチュ（門中）が拝む場所である。ティーダというのは太陽のことであるという。カーの利用はこの谷筋では上の方のナーカヌカー、下の方のミーガー・ジョーガーが多かった。



名 称	No.	ナーカヌカー		
	Ⅱ－11			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	ウス クミ ナル 塩 汲 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
谷筋を掘ったカー	嘉陽層	放 置	金武中学校に隣接する谷筋の一番上にあるカー。 谷の上は民家になっている。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
・ 香炉がある。 ・ ティーダガーの参道から遙拝する人がいる。 ・ かつて正月に拝んでいた。		・ ナーカーのパーパーがカーをしきっていて、小さい頃そこで遊ぶと叱られた。 ・ 田んぼに流れていた。 ・ 飲料水、洗濯。		
				

名 称	No.	ウガミヌカー		
	Ⅱ-12			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	ウガミバル 御 嶽 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
自然流水	嘉陽層		ゲートボール場	・現在の大城英三さん宅の下のあたり。 ・きれいなカーであった。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
			ウガミバルー帯はかつて聖域で、人々の立ち入ることのできない場所であった。 當山久三がウガミバルを開いた後に、地域の人々が利用するようになった。	

名 称	No.	なし (クブフクジングラーの前)		
	Ⅱ-13			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武 (金武区)	イリ ウス クミ バル 西 塩 汲 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
井戸 (スンジャ)	嘉陽層	放 置	谷筋の奥、10m 程度下がっている。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
なし。		いつ頃堀られたかは分からないが、新里栄蔵さんが昭和9年フィリピンから帰った時はあった。 10世帯程で使用しており、土地は安富祖正憲さんのものであった。深さは12～13m。滑車があり、縄は、わら縄の三本綱で、半年ほどで切れた。 飲料水だけに利用され、洗濯はタチミチに行った。 水浴はウッカガーに行く人もいたし、ムーアレグムイで浴びる人もいた。 水汲み用具は、ターグ・シチタンバク。女の人が頭の上に載せるのは、ターグよりやや大きめの桶であった。よそのカーには水汲みには行けなかった。(心理的に他所という意識があった)		
備 考 ◇水運搬の用具 ・棒で担ぐターグ ・女の人の頭上に載せるおけ ・女の人の頭上に載せるカメ ・シチタンバク ・バケツ ◇洗濯の用具 ・ハンジリー (木製の洗濯タライ) ・バーキ ・洗濯板 ・アルミのタライ ・アメリカ製のタライ				

名 称	No.	なし（アブントの隣）		
	Ⅱ－14			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（金武区）		ソ ン ダカリ 京 村 渠	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
たて形の堀り抜き。 （スンジャ）		石灰岩	そのままの状態で 蓋をして保存されて いる。	住宅街の道の境 にあり、上を国道 が走る。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	

備 考

寺武門組の半分ほどが利用した。マジケの道向かいに、イーチャー（池）があった。日照りが続くと、夜中から起きてきて水汲みに行った。15ヒロ程の深い井戸であった。

干ばつが続くと、マイニングッガーやウッカガーまで水汲みに行った。

つるべの縄はワラ縄で、縄を打ったりするのは、順番を組んでやっていた。

つるべは、桶であった（戦後はカン）。水汲みの用具は、シチタンバクが一般的であったが、ターグ（水汲み桶）を利用したこともあった。

家には、半胴とミズガーミがあった。ミズガーミは雨水をためる役割もあった。牛・馬・ヤギ・ニワトリ・アハワー（母豚）・シシブタもいたので半胴だけでは十分ではなかった。井戸さらいの職人がいて、頼んでさらっていた。

洗濯は、寺の後ろに耕地整理の水道があったので、そこでやったり、タマタグチの湧き水のクムイを利用した。

水浴は、マイニングッガーで洗濯をしながらやった。

冬は、レンガの窯で、湯をわかしていた。イーチャー（池）で洗ってきたイモは家ですすぐ。

タクスージには、個人の井戸があり、アブントにはタンクがあった。戦後は、この井戸で若水を汲んだが、小さい頃はウッカガーまで行った。

カーウリーはウッカガーに行った。お産で汚れたものを洗いながらイチチビンで汲んでいた。



名 称	No.	なし（アタイの前）		
	Ⅱ－15			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（金武区）		ソ ン ダカリ 京 村 渠	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
竪掘りの井戸 （スンジャ）。		石灰岩	住宅地。 三叉路の真中に松 の木が一本立ってい る。その場所が井戸 の跡である。	寺武門組・後組・ 内組に隣接し、石灰 岩の傾斜地の住宅地 域。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
			水汲み場。	

備 考

10世帯ほどで使っており、管理は吉田松吉がやっていた。
 井戸さらいは使用している人たちがやった。
 深い井戸であった。
 渇水期には水が乏しく、タマタグチまで汲みに行くこともあった。



名 称	No.	なし（サンジョングワの前）		
	Ⅱ-16			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（金武区）		クシ シン ダカリ 後 村 渠	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
堅掘りの井戸 （スンジャ）		石灰岩	潰されている。	住宅地 前を国道が走る。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
			付近の7～8世帯が利用していた。 （ペーキー・ハンタ・マージャングワ・ ウィージョ・ジャーナングワ・メーカジ・ 前田旅館・サンジョングワ）	

名 称	No.	なし（カララの隣）		
	Ⅱ－17			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（金武区）		クシ ン ダカリ 後 村 渠	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
縦穴の堀り抜き井戸（スンジャ）。		石灰岩	町営の水道の水源地。ポンプアップしている。	石灰岩のやや底地 すく にある。かつての宿道 みち がかたわらから通っていた。 住宅地域。 観音寺・カミサギ・ノンドロチに近い。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
			・ 飲料水 ・ イモを洗う。	

備考

深さ約20m。カララ組、仲間組の人たちが利用した。道を隔ててイーチー（池）があった。干ばつになると水が少なくなって濁った。その時は、家で濁りを澄まして使った。

ウチンダカリから汲みに来た人もいた。水使用の権利関係があったか。

石灰岩で時々くずれる。

夏の行水は、草刈りをしながら、ハルのクムイでやった。洗濯はここではやっていない。

つるべの縄は、麻縄とわら縄であった。

つるべは、桶が強くて良かった。バケツを使っているときもあった。干ばつの時は、ウッカガーに汲みに行っている。

水タンクを設置してある家庭も仲間組に2、3軒はあった。

冬の間、フロは1、2度であった。並里のユーフルヤーに行った。



名 称	No.	なし（ウチンダカリ）		
	Ⅱ－18			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（並里区）	クシ ン ダカリ 後 村 渠		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
豎掘の井戸 （スンジャ）。	石灰岩	埋めて、パイプを 通してある。	となりにクムイが あった。 住宅地	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
		近傍のチュンダカリ（10数世帯）が、 金武区・並里区にかかわらず利用していた。 カララあたりから汲みに来る人もいた。		

備考

深くて底が見えなかった。夕方の水汲み時になると順番待ちが長く、ウッカガーに汲みに行く人もいた。



名 称	No.	なし（マヌフスカの隣）		
	Ⅱ－19			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（並里区）	クシダカリ 後 村 渠		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
竪掘りの井戸 （スンジャ）。	石灰岩	パイプを通して埋 めてある。	住宅地	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
		内組の7～8世帯が使っていた。		

備 考

トゥナナヒル（17尋）程の深さがあり、天気の良い日しか底が見えなかった。

大城孝太郎の父親（蒲戸）が大正期に掘った。最初はヒガ・フスカングラー・クウシチャ
ーの3世帯で使っていた。後にタカラングラー・ヤージグラー・テルキナ・スラマーが加
わる。後に利用した人たちもいくらか金を出した。

隣接してクムイがあった。

井戸さらいは専門の人をたのんでやったこともあったが、組の人たちでやったこともあつ
た。オーダーに乗って降りて行った。

縄は最初、藁で打った。その後は麻縄を使うようになっていた。

つるべは桶・専用のバケツを店で買った。



名 称	No.	なし（メージングワールの隣）		
	Ⅱ－20			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（並里区）	グ ヤ バル 呉 屋 原	5 5 3 8－2	
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
竪掘の井戸 （スンジャ）。	石灰岩	パイプを埋設し、 花壇になっている。	呉屋原・後村渠の 住宅地。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
		1 0 世帯程で使用。		

備 考

隣接してクムイがあった。イモを洗いスンジャですすいだ。
井戸さらいは冬にやった。夏だと外気との温度差が大きく冷たすぎた。
洗濯・水浴・カンジャバー洗いはウッカガーに行った。
つるべの縄は、戦後は電話ケーブルなども使った。スーグーの縄（棕梠縄）なども使った。
つるべは菓莢・シチタンバク・アメリカバケツ等を使った。
大正時代に掘られたといわれ、メージングワールの当主（伊芸虎之助）が当時は南洋にあり、土地7坪を提供する代わりに分担金と労力提供を免ぜられた。



名 称	No.	なし（ンダトゥマシチャの前）		
	Ⅱ－21			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（並里区）		ナーカン ダカリ 仲 村 渠	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
竪掘りの井戸 （スンジャ）。		石灰岩	遊び場	並里で水の乏しい 石灰岩の住宅地域。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
			ンダトゥー帯の10数世帯程度で使っていた。	

備考

ンダトゥマシチャの前にスンジャがあり、カミジングラーの前にクムイがあった。
1 2、3 尋はあったかと思われる深い井戸であった。太陽が真上に来た時しか底は見えなかった。

利用するチネーが集って綱を打った。藁の縄でしばしば切れ、片方で汲む時もあった。

水質はあまり良くなく、ウッカガーから汲んでくる水と井戸の水は別の半胴に入れて使った。豚や牛馬もいたので、井戸の水はそれに使った。もの心つく頃に井戸はあった（大正7年生）。



名 称	No.	アナガー		
	Ⅱ－22			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（金武区）		クシ ン ダカリ 後 村 渠	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
自然流水		石灰岩	ドリーネは埋め立てられて、カーだけは保存されている。 日頃、鍵がかかっている。 正月の拝みの日は、区事務所に鍵を開けてもらう。	・ 陥没ドリーネの底にある典型的なウリガー。 ・ 近くにヌンドロチ、カミサギ、トゥムスズがある。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
特定の門中が旧正月に拝む。			・ 渇水期は水が少なくなり、雨期には増えた。 ・ ワクの部分と流れてきている所からなっている。 ・ 地域の人たちはここから汲んでいた。 ・ 流れる川で浴びることもあった。 ・ 洗濯はウッカガーに行った。 アナガーに近い、イーシンニーの伊芸千代子さんは言う。 「飲み水は、カララのスンジャとウッカガーから汲んだ。ブタのエサのための水はアナガーから汲んだ。飲み水としては余り良くなかった。ジーマーのタンクを利用することもあった。イモはカララの池で洗った。イジペーキーに個人の井戸があった。洗濯は、アナガーとウッカガーを利用した。カーとは、この家では当然のこととしてウッカガーのことを指す。かつては旧正に拝んだ。ハワイ帰りのじいさん（久吉）が元気な頃は、よく拝んだ。」	

名 称	No.	テ－ラガー		
	Ⅱ－23			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（金武区）	オーカワバル 大 川 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
自然流水	石灰岩		放 置	陥没ドリーネの底
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
			・周辺の20～30世帯が使用。 ・戦後銭湯の用水としても使われた。 ・アガリハントの所有地でワクではなかった。 ・この水は、アナガペーキーのあたりに至るといわれた。	
				

名 称	No.	ウッカガー (大川)		
	Ⅱ-24			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武 (並里区)	オーカワバル 大 川 原	6 4 1 - 2	
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
井せき (ヒージャー)	石灰岩		水田用水	公園化されている。 カーヤマがある。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
・金武、並里のほとんどのムンチュのカーウガミの対象となっている。正月・6月・9月。 ・チネーのウガミ・正月。 ・若水。 金武・並里の若水を汲む場所であった。水道が設置され、各家庭に水がゆきわたるようになった後は若水を汲む人も少なくなった。 ・カーウリー・ウブミズ・イブイ水。 ・戦前、金武ノロが正月に拝む場所の一つであった。			・生活のための水を汲む場所。 ・洗濯・イモ・野菜洗い・水浴。 ・水田用水。 ・ユーフルヤー (銭湯) の水。 ・井戸端会議 (情報交換の場所) 。 ・子供たちの遊び場・水に親しむ場所。	
備 考 『 並里の村や 風水から変わてい 村のまんなかに 走川いしてい 』 「古代からつきることなく湧き出る大川の泉は、大正13年、昭和天皇の御成婚を記念して構築。あれから66年経過、水漏れにより平成2年3月改修、郷土色豊に装いを新たにしました。神泉ともいべき湧は、住民の命の水である。長命の泉ともいわれている。元旦の朝は若水を汲む人々で賑わった。余水は武田原に注ぎ、稲、水芋の名産地となっている。大川周辺は幾度か変遷、現在は児童公園に変貌、生活文化の根元である大川は未来永劫平和と繁栄を象徴するように湧き続けることであろう。」 「大川の碑文」 「もともとは、ウッカー (ウフカー) 。 県内有数の湧泉で、かつては日量3,600トン (昭和53年) の湧水量を誇った。 現在は千トン程度である。 並里の多くの人々はこの水によって、命をつないできた。水を汲み、洗濯をし、イモや野				

菜を洗い、水浴をし、牛馬を浴びせ共同風呂を作った。人々は、朝に夕に、ここに集い井戸端会議を開いた。情報交換の場所でもあった。

大正12年までは3つのガマグチから、水が昼夜をおかず湧き溢れ滔々と流れていた。その頃せきはなかった。下の方に松材を3本ほど横たえて洗濯場としていた。水はガマグチの近くで汲んだ。イモやキュードグ（クワなどの農具）は洗濯場より下で洗った。その下で馬を浴びせた。井せきが作られ樋が作られた。

金武で最初のコンクリートの構造物である。洗濯場は後で作られた。奥間源蔵の設計管理といわれている。

当時、堀りわりはなく水はシチャラングワーの北側のガマに流れ込んで、ヒラタガマに至ったといわれている。

大雨の時は、美里原、仲畑慶原、ウィンダカリー帯の水が大川トゥマジャ原一帯に流れ込んで数日間滞留した。

日々の生活の中で、水汲みは不可欠で、人間だけでなく牛馬の水もかついで運ばなければならなかった。

小学校の高学年になると、朝の2～3回の水汲みは日課であった。ンタバルの水田を涵養する水源である。

ペリー一行が金武に来たとき、ここでポンプを使っているのを見て村人は目を回したそうである。」

カーヤマ

泉を聖なるものとみなし、その神を木に抱いて保護し崇めた。

カーはイブイガー・ウブガーとしての信仰の対象である。

香炉が置かれ、正月・6月あるいは9月9日などの日、ムンチュ（門中）によって礼拝される。

『並里区誌』 P108

「新里善助が村長の時、改修工事が計画された。大正12年の大川の改修費用は、金武・並里両区で負担し（1600円）、青年男女の無料出役も10日程であった。」

『金武町誌』昭和58年

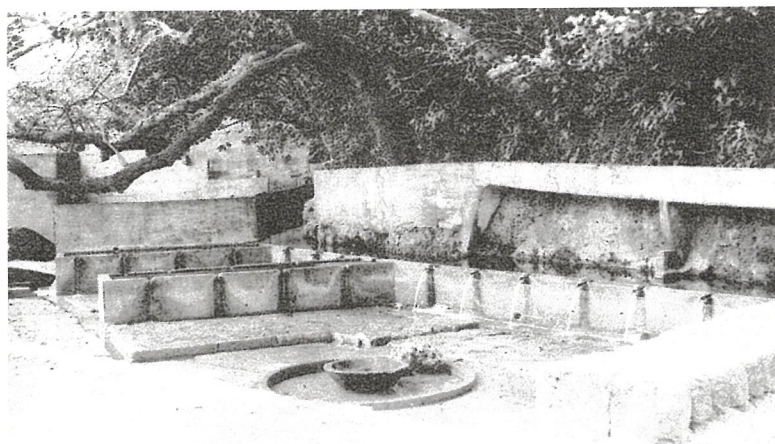
- ・ カーフダがあった。
- ・ 区事務所が管理していた。
- ・ 通常の清掃は、部落の生徒会が日曜日の朝にやった。
- ・ 特別の清掃は春秋のスンジブーのとき行った。
- ・ 金武区の人、ウツカンバビラの高さに水を汲みあぐねた。
- ・ 県内有数の泉で、戦前から金武小学校の校舎とともに名所であった。
- ・ 移民として故郷を遠く離れた人たちには、昔のウツカガーが脳裏に焼きついていた。
- ・ 子供たちは、ここで水に親しみ、泳ぎを覚えた。小河童たちの天国であった。
- ・ 1962年に、弁務官資金でできた並里の簡易水道の水源であった。

金武町指定文化財

2003年



戦 前



(金武町指定文化財)

金 武 大 河

大川のカー拌み
昭和30年代



名 称	No.	ヌンドゥルチガー		
	Ⅱ－25			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（並里区）		ナーカンダカリ 仲 村 渠	
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
自然流水	石灰岩		コンクリートの管で立ち上がりを作り、空気抜きのパイプを向かいの拝所に通してある。 ゲートボール場になっている。	石灰岩と嘉陽層にはさまれた窪地。ヌンドロチヤーシキといわれ、金武ノロの筋のカーヌウィーの土地があった。
信仰との関わり				
戦前、金武ノロが正月にアナガー、ティーダガーとともに拝む場所であった。香炉があり、その香炉は向かいの祠に移されている。埋め立てる際、カーの信仰に厚い人との間にあつれきがあった。				
				
				
小さな田が近くにあった。ヌンドロチヤーシキが、どのような性格のものであったか分かってない。ヌンドロチがあったのか、単なるノロの居住の場所であったのか。地域の人々は、このあたりが並里の発祥の地だと考えている。 旧暦、8月のヨーカビーはここから上がったという人もいる。 王府時代、東向かいにウドゥンヤーシキがあったとされている。 この場所をキンタヌンドロチという人もいる。				

名 称	No.	イジュミングワ		
	Ⅱ-26			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（並里区）		サ ク ムトウバル 佐 久 本 原	
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
自然流水	石灰岩	放 置	農地（畑・田） 近くにウシナボーがある。かつては大きな松の木があった。	
信仰との関わり				
ウンシーとして拝まれた時期もあった。			水道が設置される前のようす	
			シマチスジノリの自生地であったが、一度埋め立てたため絶えている。石灰岩から流れる小さな泉。一帯は苗代田であった。この近くのウフンジューでは洗濯、水浴、豚の解体なども行われた。大正時代までは、このあたりまでガンヌクワ（ボラの幼魚）がのぼってきた。『並里区誌』 ウフンジューの工事のとき、このあたりからヒルギの根っこが掘り出された。	
				
戦後のイジュミングワ 人の立っている右手（並里写真集）				

名 称	No.	キンタガー（慶武田川）		
	Ⅱ－27			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（並里区）		アガリンダカリ 東江村渠	9 9 1
			キンタバル 慶武田原	1 0 4 6
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
ヒージャー		石灰岩	現在使用。 （水田用水） 洗濯。	カーヤマに香炉があり、香炉の奥には「神泉」というコンクリートの碑がある。カーヤマには昔の蹊 ^{みち} の跡がある。 ンタバルを前に、 周辺に屋敷が広がる。 いわゆるキンターの集落。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
・ 香炉があり、並里のいくつかのムンチュ（門中）、及びチネーが礼拝する。 ・ 地域の人々が若水を汲む。 ・ 「あきま年からナンジャムルシ、クガニムルシ、入っちウタビンソーリ」			・ 生活のための水を汲む場所。 ・ 洗濯・イモ・野菜洗い・水浴。 ・ 水田用水・種モミを浸す。 ・ 子供たちの遊び場。	
備 考				
・ シマチスジノリの自生地であった。 ・ キンターの集落は、このカーを中心にできた人々は考えている。慶武田原の水田はこの水によって涵養される。現在の設備は、昭和7年頃できた。その前は、自然に湧き流れるにまかせた中に松材を横たえただけであった。『並里区誌』P110				
「キンタガーの水や底から湧ちゆる 五つ六つ童（わらび）手洗れどくくる」 （「ムッスナイナイ」に、歌われる）				

「天人（アーマンチュー）ゆはじみ
慶武田原 上（ヌ）ぶようち

エー アマエーダーや 米ぬ湧ちあがる ユイ
泉口さとうようち ましの形 作くようち

エー アマエーダーや
米ぬ湧ちあがる ユイ」

（アマエーダー 「長者の大主」）

- ・水道の設置のあと、この地域の戸数が漸減している。
- ・男女別の水浴場がある。子供たちはここで水に親しみ、泳ぎを覚えた。
- ・道路を挟んで水汲み場・水浴場は東江村渠、洗濯場・イモ洗い場は、慶武田原になっている。現在の設備ができるまでは、カーヤマの^{みち}蹊から南が慶武田原だったと思われる。

金武町指定文化財



水浴場に
浸されて
いるモミ

2003年



名 称	No.	カングワー		
	Ⅱ－28			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（並里区）	アガリンダカリ 東 江 村 渠		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
堀り込み	嘉陽層	平成１２年、コンクリートの崩落のため、並里区がもとの形のまま新たに作った。	崖の下。前は田んぼ。周辺に２～３軒の民家がある。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
かつては拝まれた。		ンジュイー帯の人々はここから水を汲んだ。掘ったカーである。 隣にはムーアレグムイ（芋洗小堀）があった。 設備は昭和の初期、仲田丹兵衛によってコンクリートで作られた。それ以前、大正の初め頃、仲田丹兵衛と伊芸福吉の二人で掘り込みをした。 雨の日には、水が濁った。 サーマタのサクダーは、この小さな流れにたよっていた。		



名 称	No.	サーガ		
	Ⅱ－29			
所在地	字	小 字	地 番	
	金武（並里区）	フックワバル 福 花 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
ヒージャー	石灰岩	ウナギ養殖場の水源 地となっている。	石灰岩低地のワク。 （サーガの地名はこの ような地形から呼 ばれるようになった と思われる。）	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
水のウンシー。現在も拝む 人がある。 香炉がある。		ンジュイの人たちの洗濯、水浴、水汲みの場所。 野良帰りの汚れを落としたり、洗濯して草原に干し、野良帰りに洗濯物をバーキなどに取り込んで帰った。 日秀上人がフックワにたどりつきヒジャの人に助けられ、ここで水を飲み、お茶のようにおいしい水であるということからサーガ（茶川）と呼ぶようになったという由来譚がある。 一帯の水田を涵養していた。 近くにサーガの名前をいただく屋号が2つある。		



名 称	No.	クーランチャヌモーイジュミ		
	Ⅱ－30			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（並里区）		フックワバル 福 花 原	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
自然流水		石灰岩	道路から排水が流れ込んでくるため、ブロックで囲われている。	石灰岩の崖下から湧き出してくる。前に福花の水田が広がる。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
・ 拝まれている。 ・ 以前は、盛んに拝まれていた。 ・ ウンシー。			地の底から、舞うように盛り上がるように湧いてくるイズミをモーイジュミという。一帯の水田を潤した。ここで山羊を解体した。	



名 称	No.	タキシヌイジュミングワ		
	Ⅱ－31			
所在地	字		小 字	地 番
	金武（並里区）		タ キ シ バル 田 慶 志 原	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
自然流水		石灰岩	一時、涸れていたが農道の工事で土砂がさらわれて、最近湧いてきている。	あたりは、ターバタキが多かった。あたりの水田を潤した。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
香炉はなかったが、かつては拝まれていた。			山羊を解体する場所であつたりした。アガリトーマングワのバアサンが管理していた。	



名 称	No.	ウブガー		
	Ⅲ－1			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	イーヌシマバル 上 島 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
囲いがあった。	湿地堆積物		美徳川の川べりに 香炉がある。	北側を沖縄自動車 道の高架橋が走って いる。 東隣に崎山酒造所が ある。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
ウブミズ、若水を汲んだ。 正月のカーメー（井泉参り）の場所。 タシマ（他島）の人がムヌシリーと一緒に にしばしば拝みに来る。			上の島の村落があった時代に使われてい たとされている。	



名 称	No.	ヤングマタガー		
	Ⅲ－2			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	イースシマバル 上 島 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
自然流水 設備なし。	嘉陽層		雑草がはえている。	谷間にある。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
正月カーメー（井泉参り）の場所の一つであった。 伊芸ムンチュが旧正月、午前9時頃に拝む。			集落移動以前に使われていたとされているカー。	
				

名 称	No.	不 詳		
	Ⅲ－3			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	イーヌシマバル 上 島 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
		土地改良後、農道脇にパイプを埋設してある。 香炉がある。	土地改良後、キビ畑になっている。 見晴らしがよい。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
正月のカーメー（井泉参り）の場所の一つ。				



名 称	No.	不 詳		
	Ⅲ－４			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	イースシマバル 上 島 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
	国頭マージ。	土地改良後、農道脇にパイプを埋設してある。 香炉がある。	土地改良後、キビ畑になっている。 見晴らしがよい。	
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
正月のカーメー（井泉参り）の場所の一つ。				

備考

近くに土地改良の砂沈地があり、その南あたりにカータガーの水を使う場所があった。



名 称	No.	不 詳		
	Ⅲ－5			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	イヌシマバル 上 島 原		
形 態	地 質	現 況	周辺の状況	
	国頭マージ。	クロツグを一本植えてある。		
信仰との関わり		水道が設置される前のようす		
正月のカーメーの場所の一つとなっている。				



名 称	No.	インジミー		
	Ⅲ－6			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	イーヌシマバル 上 島 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
石で囲われた泉。	嘉陽層		フェンスで囲いが されている。 香炉が置かれている。	北に公民館。田ん ぼを挟んで南に集落 がある。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
旧正月一日のカーメー（井泉参り）の場 所の一つ。			集落の中央部の人たちはこのカーを利用 した。	



名 称	No.	不 詳		
	Ⅲ－ 7			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	イヌシマバル 上 島 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
	石灰岩		現在の公民館の倉庫あたりにカーがあったといわれている。倉庫の北側に香炉が置いてある。遷座したウタキの後にビニールパイプを埋設、香炉が置いてある。	復帰後、西側にグラウンドができ、南側に公民館ができた。昭和16年にクシヌウタキが近くに移動した。 ウタキの前に神ヤーがある。戦前、現在の神ヤーの隣にヌルヤーがあった。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
現在はよその人が拝みに来る。 戦前は正月にカーメー（井泉参り）をした。				



名 称	No.	不 詳		
	Ⅲ－8			
所在地	字	小 字	地 番	
	伊 芸	シ ッ チ 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
	砂岩		近くに墓地がある。 湿地帯のややあがった所に祠があり、 海のサンゴ石の香炉がある。	雑木林になっていてクロツグなども生えている。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
正月のカーメー（井泉参り）の場所であった。				



名 称	No.	ユンダガー		
	IV－1			
所在地	字	小 字	地 番	
	屋 嘉	ウィーフクジバル 上 福 地 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
斜面を掘ったカー	名護層		堀り込みがあるが、 水が湧いていない。 香炉がある。	雑木がはえ、前が 田になっている。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
屋嘉の区のカー拌みの対象となっている。 (正月3日・5月13日・6月25日)				
備考 現在の屋嘉は、かつて屋嘉（賀）村と前田村が一つになって成立したと言われている。屋嘉村の故地がこのあたりとされている。 上の島のムラガーだったといわれている。 				

名 称	No.	不 詳		
	IV-2			
所在地	字		小 字	地 番
	屋 嘉		メープクバル 前 袋 原	
形 態		地 質	現 況	周辺の状況
			畑地が広がる。	
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
集落移動前に使用されていたと思われる。				

備 考

前袋原アガリウタキの北に2つのカーがあった。農地改良によって潰れ、2基の香炉は現在道路の脇に移動し据えられている。



名 称	No.	ウフカー			
	IV－3				
所在地	字		小 字		地 番
	屋 嘉		ムラ 村	ウチ 内	
形 態		地 質		現 況	周辺の状況
豎堀りの井戸。 石積みである。		砂地 (基底は名護層)		屋根がついている。 現在使用されていない。	近くに、イリウタ キがあり、周囲は住 宅地である。
信仰との関わり				水道が設置される前のようす	
・ウブガーであり、死水をとるカーである。 ・若水もここから汲んだ。 ・屋嘉の村ガー。 ・正月3日、5月13日、5月25日は区の拌みの 対象となっている。				日常の飲み水。	

備 考

- ・カードーが、カーを酒一升で管理していた。カードーは大川端の分家である。
現在カーの管理は屋嘉区が行っている。
- ・屋嘉の部落は、収容所ができる時に敷きならされて井戸も埋まっていたのを、区民が部落への帰還後、掘り返して修復した。その後しばらくは若水を汲んだ。

金武町指定文化財



名 称	No.	メーダガー（メーダウツカイ）		
	Ⅳ－４			
所在地	字	小 字	地 番	
	屋 嘉	メーダ バル 前 田 原		
形 態	地 質		現 況	周辺の状況
			道路の下になって いる。 香炉がある。	このあたりから、 イリヌウタキの下あ たりが、メーダムラ の故地といわれてい る。
信仰との関わり			水道が設置される前のようす	
前田ムンチュの信仰の対象となっていた。 現在は屋嘉区のカー拝みの対象となっている。 最近から正月、5月13日、6月25日、屋嘉区 の拝みとして拝まれている。				
備考 前田川から導水して きたカーともいわれて いる。 この水は前田の鍛冶 屋まで導水されていた。 前田川の上流から導 水のためのかけ樋をし たり、溝を掘ったりし てここで使った。 				

4. 中川、金武・並里のカー

(1) 中川区のカーと水を取りまく状況

(地図 1 を参照)

中川区には4つの「カー」がある。①・②ナコーガ・③ギンバルガータ・④ティカジャーがそれである。

①・②は人の手によって掘られたカーで、地質は嘉陽層である。

③・④は石灰岩から湧き出してくる水である。

中川には開墾時に掘られた個人の井戸が18あった。渇水期には水が少なくなったり枯れたりしたところが多く、谷間の水やカーラの水を利用した。

③ギンバルガータ、④ティカジャーまで汲みに行った。中には馬車にドラム缶を積んで、キンタガーまで行ったという人もいる。

小字志那田原を流れる川はウルンガーといわれ、流れの近くに居住する人々が洗濯や水浴に利用した。

高速道路の100m下方に石を積んだりして水浴や洗濯をした跡が残っている。

この近くに名称不明の「カー」がある。(地図①)川の横を掘ってコンクリートの囲いをしたものであるが、開墾時代に作られたものか。

現在の中川公民館東の谷間にも洗濯や水浴をしたりする場所があり、②上ナコーガと言った。この川は流れて中川原に至るが、ここにも水場があり、③サラバと言った。花城文進さん(大正元年生)は、若い頃ここで水を汲んだ。洗濯や子供の水遊び・水浴の場所でもあった。

中川では、水をめぐる人々の生活で、カーは単独ではありえず、流れる川、家庭の井戸、名もない小さな泉、あるいは谷間の水が補完していた。

沖縄戦末期から終戦後にかけて、現在の中川区一帯には民間人の捕虜、他市町村からの難民、並里区の住民(難民)を含めておよそ一万人の人々がいたといわれているが、食糧や身の安全・居住・衛生もさることながら水についても苦労したと思われる。

(2) 金武・並里の地形・地質とカー

(地図 2・3 を参照)

金武区の国道の北（仲間渠）、並里の集落のほとんどが石灰岩の地質であり、地下水の豊富な地域である。

「金武区の②②アナガー、並里区の②④大川、②⑦キンタガーは恩納岳の北麓から大兼久原を結ぶ断層の線にある。」（島袋伸三 1998年『並里区誌』）

大川、キンタガーは豊富な水量に恵まれ、近辺の人たちは水の恩恵を大いに受けた。並里でも石灰岩の高台にある地域（後村渠・呉屋原・美里原）の人々は、水を得るのに苦労している。

金武区の自然流水による主なカーは、②②アナガーと②③テラガーである。

金武区の人々は、並里区の人々以上に水の苦労をしている。金武区の豎掘りの共同の井戸（スンジャ）は、5カ所である。それも水量が豊富であるという訳ではなかった。

並里の共同の井戸は4カ所である。いずれも大川に遠い石灰岩の台地にある。

金武区の国道からほぼ南側（小字、京村渠・御嶽原・塩汲原・西塩汲原一帯）は嘉陽層である。南の方向に谷筋が4つ走っており、谷の横の土手を掘り、浸透してきた水をためて使うようになっている。

金武・並里の石灰岩から湧き出てくるカーのうち、アナガー・テラガー・大川、キンタガーは石灰岩のドリーネの底にある。

石灰岩台地が傾斜をなしてつきる辺縁部の底地に、いくつかのカーがある。

難原、浜田原の名称不詳のカーがそうであり、佐久本原の②⑥イジュミングワー、②⑦キンタガー、②⑨サーガ、③⑩クーランチャヌモーイジュミ、③⑪タキシヌイジュミングワーがそれである。

(3) 金武区の谷すじのカー（嘉陽層のカー）

（地図 2・3 を参照）

- 1) 塩汲原の西の端、金武中学校の西の谷筋の尾根あたりが、かつてのタクシ組の住宅地域であった。この谷筋を上から辿ってみる。上から、⑪ナーカヌカー、⑩ティーダガー、⑨ミーガー、⑧ジョーガーとティーダガーを除いて、いずれも谷すじの根もとあたりを掘って作ったカーである。ティーダガーは斜面のやや上に掘られている。水を利用した跡もないし、利用したという話も聞かないが、金武・並里のカーウガミの地になっている。
- 2) かつてのタクシ組と、内組の尾根の間を谷すじが走っている。⑦シマンガはその谷すじにあったが、谷すじが埋め立てられ、空気抜きの管が地上まで出ている。この谷すじの下方標高25mあたりに⑥タチミチがある。水は豊富だった。渇水期には、人々は水を求めてここまでやってきた。
- 3) かつての内組と京組の尾根の間を走る谷すじに、⑤マイニングッガーがある。京組の人々の利用したカーである。
- 4) 京組の西に、③タマタグチに通じる谷がある。この谷は杉の子保育園の裏からターキンチャの旧発電所通りを通る谷すじ（現在埋め立てられている）とタマタグチで出合う。タマタグチの西側の底から水が湧いてくる。渇水期には寺武門組あたりから水汲みに来ている。戦後、銭湯の水や、モヤシの製造の水をまかなった。水量は豊富であった。もう一つは、やや下方斜面の中腹あたりに斜面を掘り込んだカーがある。集落から離れたカーである。

(2) 金武・並里のカーウガミ（井泉拝み）

門中（ムンチュ）によってもちがうが正月、6月ウマチー・6月カシチー・9月9日等に一連の拝むべき場所の一つとしてカーを拝む。たとえば並里のAムンチュは、旧暦6月15日の6月ウマチーには、Aムンチュのカミヤーに集まり、ウッカー⇒ナーカヌウタキ⇒ティーダガー⇒ヌンドロチという順に拝む。

並里のTムンチュは平成14年の旧正月に、キンタガー⇒キンタヌンドロチ⇒ウッカガー⇒ティラヌガマ⇒ティーダガーという順序で拝んでいる。

金武区のOムンチュの年中行事表によると、正月神御願としてOムンチュ本家、中之御獄、前之御獄、太陽川の順で拝んでいる。

この記録で、ティーダガーは太陽川として漢字があてられている（太陽信仰との関係があるのかもしれない）。

平成14年の旧正月に金武区のKムンチュの宗家の当主は、家内の正月の拝みとして、長男と長男の子供と一緒に、ウッカガーを拝んでいる。Kムンチュは旧暦9月18日にティーダガーとウッカガーを拝む。

ウッカガーにほど近いK家の70代の女性は、息子と二人で家内の拝みをしている。

宜野座村惣慶出身のSさんは、30年来新開地に住んでいるが、旧正月には夫婦で金武のヌンドロチ・ウッカガーを拝む。その後で、惣慶のムートウヤー・宜野座のヌンドロチ、そしてウフカーを拝む。この地域にお世話になっているからそうするという。

金武・並里は戦前にノロが絶え、ノロを中心とした村落祭祀は行われていない。従って、ノロを中心としたカーの拝みも行われていない。

ムンチュの祭祀もカミンチュを中心とした祭祀はほとんどない。従って、カーの拝みもカミンチュを中心としたものではない。

ムンチュの祭祀は、熱心な人々が数名集まって行われているところが多い。

30あるといわれている金武・並里のムンチュ（『金武町誌』S58年）の中から、調査した13のムンチュのうち、12のムンチュがウッカガーを、正月・6月・9月のいずれかに礼拝の対象としている。

そのような意味でもウッカガーは格の高いカーである。

5. 伊芸のカー

(1) 伊芸のカー

(地図 4 を参照)

伊芸は川田川（カータガー）と美徳川に挟まれた浜堤に立地する集落である。現在、集落は屋敷原にあるが、かつて、上島原にそれはあったとされている。

平田原には戦前人家はなく、サータヤーが 3 か所あっただけである。今回の調査で確認されたカーは 8 カ所で、現在水が湧いているのは [6] インジミーの 1 カ所である。

名前が確認されたカーは [1] ウブガーと [2] ヤンガマタガー、[6] インジミーである。伊芸区は昭和 7 年に美徳川から部落の近く、上島原の辺縁まで自然の流水により、土管で導水してきた。また昭和 10 年～12 年頃、美徳川の 1 km 上流からエトナイトパイプで導水（自然流水）した。メーヌウタキにタンクを設置して道路わきへ配水した。

戦後も伊芸の人々が、収容された石川から帰ってきたとき、米軍が残してあった水道資材で給水施設を作っている。

戦前、使われたカーは [5]・[6]・[7] である。

個人の井戸が 14 カ所あったが、水質はよくなかったので、飲み水としては使っていない。個人の井戸は戦後は使っていない。

部落の東よりの家庭は美徳川も利用した。西よりの人々は、川田川（カータガー）も利用した。

夏の午後、4 時、5 時になると美徳川はカンジャバーの洗い汁で、青く染まった。

(2) 伊芸のカーメー（井泉参り）

（地図 4 を参照）

門中（ムンチュ）、チネのカーの拝みが戦前はあった。

戦後ある時期までは、部落祭祀としてカーメー（井泉参り）があり、祭祀料として区の予算に計上されたことがあった。

現在は地域の人々は拝まなくなっているが、戦後の生活改善運動（沖縄の旧習・風俗改良運動）の影響か。

戦前正月のカーメー（井泉参り）は、7で年ごとに行った。現在は、地元の人がムヌシリーと一緒にいくことがある。1ウブガーと6インジミー、7は、よその人が拝みに来る。

戦後のある時期までのカーメー（井泉参り）は、1～7までの番号の順に行われた。

旧暦 6 月 25 日、午前中は部落総出で美徳川をさらって、午後から綱を作り夜それを引いた。

「正月は年の初めの重要な行事で、門松を立て、仏壇とカマドには若松を飾り、元旦の午前 2 時、3 時頃から若水（ミー水）を美徳川から汲んで来て、ミズナデーといって必ず若水で洗顔する。また、この水で家族の一カ年の運を授かって降天するという火の神と祖霊にお茶湯（ウチャトウ）をした後、お祈り（チータチベー）をする。……その後に家族相互の挨拶をすまし、家々のお祈りがすむ頃を待って、男子は宗家に集まり川参り（カーメー）をする。ウブミズを汲む川と、先祖が水を飲んだと伝えられる川を礼拝する。行事が終わってから回礼を始める。」（安富祖一博 『村の記録』）

6. 屋嘉のカー

(1) 屋嘉のカー

(地図 5 を参照)

屋嘉の本集落は渡久比那川と前田川に挟まれた浜堤に立地している。

嘉喜又原には戦前、数世帯があった。

今回の調査で5つのカー（もしくはカーの跡）が確認されている。（④メーダガー、③ウフカー、①ユンダガー、名前が確認されていないカーが2つ）。アガリウタキの北にカーが2つあったといわれている。土地改良で潰され、香炉が2つ農道脇に移されている（合祀されているので、地図の上では1つとした）。

伝承では現在の小字「^{むらうち}村内」の村落はかつて前田村と屋嘉（賀）村が一つになって成立したとされている。

前田村の故地は小字前田原・イリウタキの西あたりとされている。メーダガーはメーダウツカイともいわれ、前田ムンチュが拝むカーであった。前田川の上流から引いてきた水であるという伝承がある。

屋嘉村の故地は小字前袋原のアガリウタキの北側に立地したとされている。ユンダガーは上の島のムラガーといわれている。

(2) 屋嘉の個人用井戸

(地図 6 を参照)

屋嘉は戦前163の世帯があり、そのうち個人の井戸が80であった。

およそ2世帯に1つの割合である。水質のよくない所もあったが、いつ頃掘ったものであるかははっきりしない。

個人の井戸のなかった頃は、屋嘉の人々は水でかなり苦労した。

前田川、渡久比那川を大いに利用した。

(3) 屋嘉のカーと祭祀

平成14年6月23日（旧暦5月13日）屋嘉の根神・仲間磯子（沖縄市在住）は、6月13日のウタカビ（お崇べ）として次のコースで回っている。

屋嘉根屋 ⇒ ビジュル神（もともとは9月19日に拝む）⇒ アガリウタキ
⇒ ① ユンダガー ⇒ 西のウタキ ⇒ ④ メーダガー ⇒ ③ ウフカー

屋嘉の区の祭祀としての性格をもち、区事務所の女の職員が一人随いた。

メーダガーはもともとメーダムンチュのカーで屋嘉の根神の拝みの対象ではなかったが、最近から拝むようになっている。

メーダガーはメーダウッカイという言い方もある。

ウフカーは屋嘉のムラガーとしての性格をもつ。

正月の若水、子供が生まれた時のウブミズ、死者を浴びせる死水もここから汲んだ。

戦後、石川・伊芸と転住を余儀なくされた屋嘉の人々が帰ってきたとき、屋嘉の居住地域は、米軍の捕虜収容所のため敷きならされ、ウフカーは埋められていた。それを掘り起こし、利用できるようにした。その後、しばらくは（その後、カーは区有地になり管理も区が行い、現在に至っている）若水をここから汲んだ。

ユンダガーは現在の部落に移る前の村ガーであったと言われている。

ウフカーバタ系統のカーでもある。

ユンダガーの近くに屋嘉ドウンチの屋敷があった。

旧暦6月25日は、カーウガミと称してそれぞれのムンチュが、それぞれのムンチュのカーを拝む。昔は、この日は東と西に分かれて綱をひいた。

旧暦8月10日（8月カシチー）にはアガリウタキ、ユンダガー、イリウタキ、メーダガー、ウフカーを拝む。

メーダガーは、メーダムンチュの拝むカーであったが、メーダムンチュは最近カーの拝みをやっていない。

根神の仲間さんが、メーダガーも拝んでいる。

7. カーをめぐる雑編

(1) 民俗芸能・民話・伝承とカー

1. 金武・並里のターブックワであるンタバルを涵養するのは②④ウッカガーと②⑦キンタガーである。

並里の「長者の大主」（並里の人々には「長者の^{ソウジャ}大主^{ウスメー}前」と親しまれている）は旧暦8月、十五夜遊びの演目のうちで主要なものである。誰でもストーリーを知っている。台詞を憶えている人もいる。

長者が舞台に登場し、口上をのべ、天気もよいので前の原（メヌハル）に出て苗代巡りでもしようか、とハルに出ていく。そこで、長者は、アーマンチュに行き逢い、新しい稲の品種を譲り受け、耕作の方法や時機、収穫の後、新穀の神仏への感謝について教示を受ける。さらに「長者の大主」という位を授かる。

メヌハルとは、ンタバルのことだと並里の観衆は当然のこととして考える。ストーリーは展開して、長者以下退場の場面に歌われるのが「アマエーダー」。

- 1) 天人^{あまんちゅ}ゆ^{きんた}始め 慶武田原上ぶようち

エー天エーダーヤ
米ぬ湧ちや上がゆい

- 2) 泉口さとうようち

エー天エーダーヤ
米ぬ湧ちや上がゆい

慶武田原とはキンタガーが涵養する一帯のハル名（小字名）である。

キンターの集落名は、この慶武田原に由来するといわれている。

「ユビ田」のため土地改良区から除外され、現在でも棚田が残る。泉に近いので、苗代が多かった。

金武岬にカミムイという地名がある。神様が休憩するところである。海の彼方からやってきたアーマンチュが、一時お休みになった後、部落に入っていくという一連のストーリーがある。人々の共通の認識・了解の中でこの演劇は理解され、楽しまれている。

2. 慶武田川の水や 底から湧ちゆる

五つ六つ童 手洗いどうくる

金武・並里で歌われている「ムッスナイナイ」にのせる歌の一つになっている。

3. 並里の村や 風水から変わてい

村のまんなかに 走川いしてい

4. 日秀上人は福花^{ふつくわ}の浜に流れ着きヒジャの人に助けられ、サーガで水を飲み、お茶のようにおいしい水であるということから、茶川^{さーが}と呼ばれるようになった。

5. 並里のムラはキンタガーを中心に始まったという伝承がある。

6. 水多き水に乏しき 金武の里

戸ごと人ごと 水配らめや

(大正13年大川が竣工した時、仲田徳三が詠んだ)

(2) 並里のカーの管理

大川・キンタガー

- 春・秋の部落清掃の日に大川の清掃を行った。
- 部落生徒会が、日曜日に清掃をした。
(3区生徒会—大川、4区生徒会—キンタガー)
- 区事務所が管理・特別の清掃・修理・補修をした。

サーガ

- カーの下に田圃のあったヌージャングラーの安富祖仁牛が時に溺っていた。

タキシヌイジュミングラー

- 隣接して田畑のあるアガリトーマングラーの婆さんが、清掃していた。

※ 「當金武村七ヶ村ニ於テ舊蕃中執行候内法約束取調書

第五十九条

井泉ニ於テ汚物ヲ洗ヒ或ハ塵芥野菜杯ヲ散乱セシメ井泉ノ
故障ヲ顧ミサルモノハ科錢拾貫文宛申付候」

『南島村内法』 P137

奥野彦六郎 (1977年)

(3) イーチャー（池）・クムイ（小掘）

金武・並里の共同井戸に隣接して、イーチャーやクムイがあった（並里ではクムイという言い方が一般的であり、金武区ではイーチャーという言い方が一般的である）。

水に乏しい金武区には、井戸とは関係なく、何カ所かにイーチャーがあった。

イモを洗うことが一般的な機能であった（時には水浴をする人もいた）。ムーアレグムイ（芋洗小掘）という言い方がある。

(4) カーとスンジャ（井戸）とタンク

金武・並里では井戸のことをスンジャという。スンジャには家庭のスンジャと共同のスンジャがある。

カーには、大川、キンタガーのように湧き出てくるカーと嘉陽層の土手を掘り込んで作ったカーがある（ナコーガ・カングラー・マイニングラー等）。

伊芸と屋嘉では、豎掘りの井戸も湧き出てくる泉もカーと呼んでいる。



昔のまま保存されている
家庭用スンジャ（並里 2003年）



現在も残るタンク

戦前・戦後を通じて、カワラ葺きの
金にゆとりのある家はタンクを造った。
（並里 2003年）



8. 地図

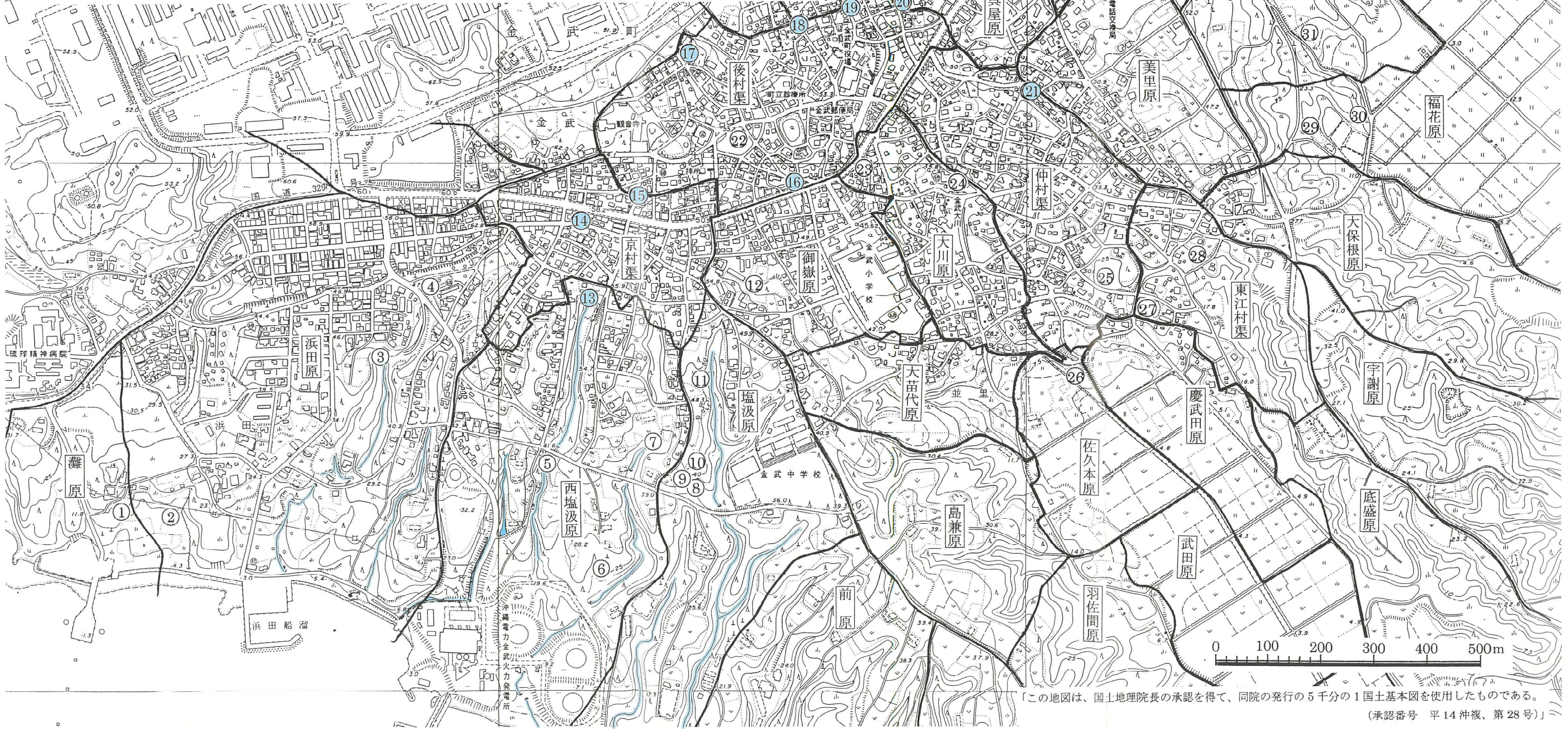
- 地図1 中川のカー（戦前）
- 地図2 金武区・並里区のカーの分布
- 地図3 金武区・並里区の村渠組界図
- 地図4 伊芸のカー（戦前）
- 地図5 屋嘉のカー（戦前）
- 地図6 屋嘉の家庭井戸

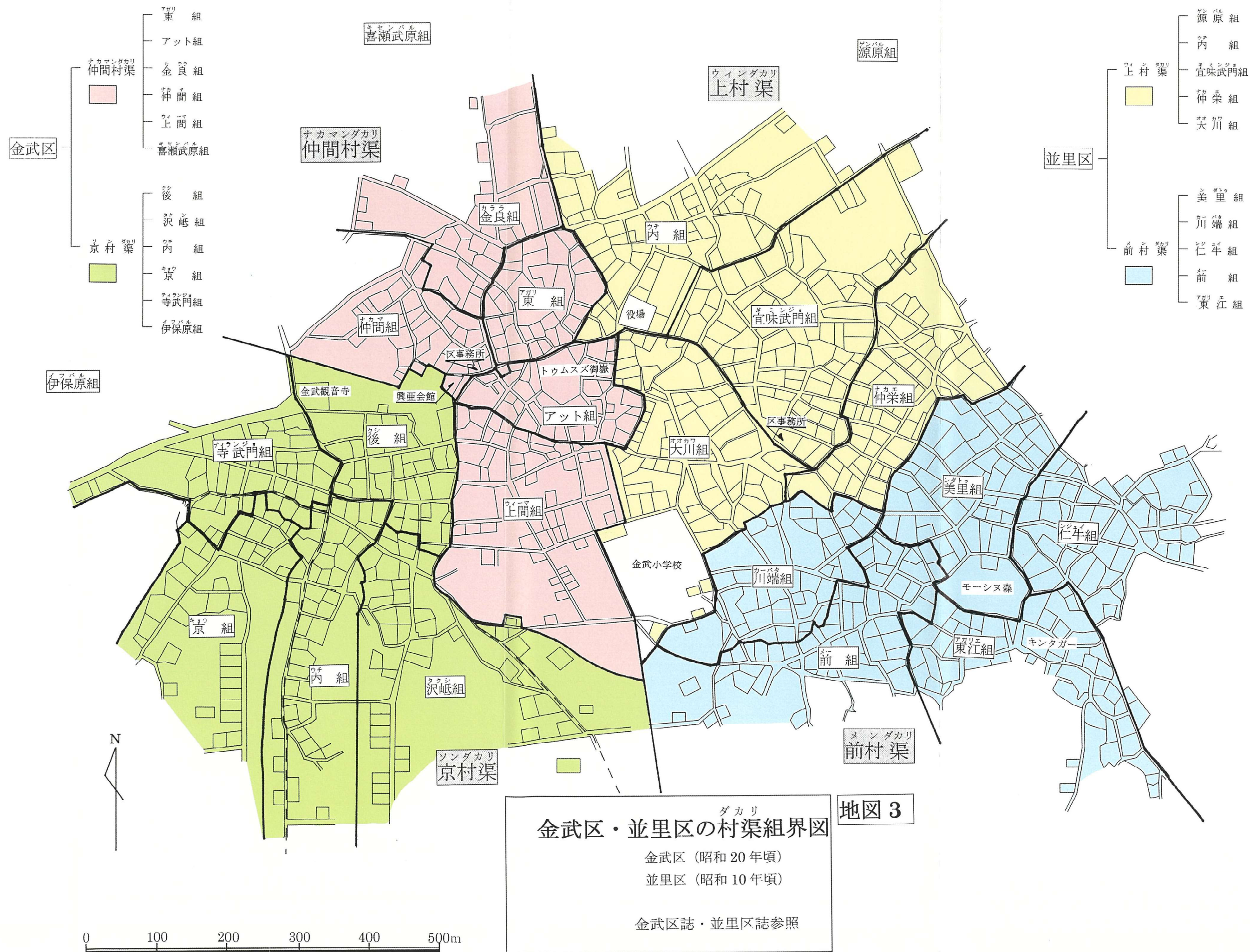


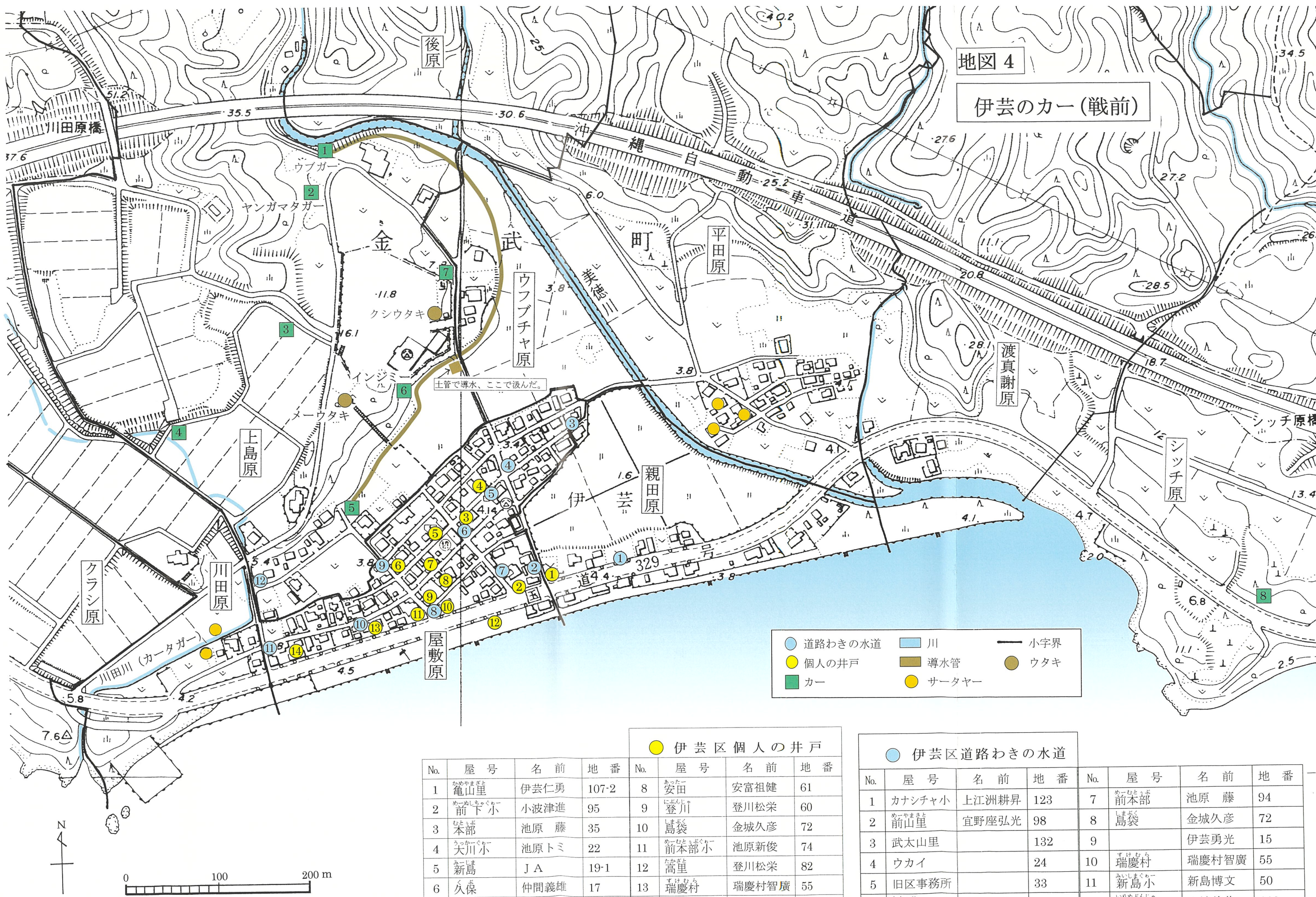
「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院の発行の5千分の1国土基本図を使用したものである。
 (承認番号 平 14 沖樫、第 28 号)」

No.	名 称	所 在	形 態	現 況	地 質	No.	名 称	所 在	形 態	現 況	地 質
1	不 詳	灘原	自然流水	使用せず	石灰岩	16	サンジヨングワの前	後村渠	スンジャ	埋 没	石灰岩
2	〃	浜田原	〃	〃	〃	17	カララの隣	後村渠	〃	水源使用	〃
3	タマダグチ	〃	自然流水 掘り込み	使用せず	嘉陽層	18	ウチンダカリ	〃	〃	埋 没	〃
4	ナッコーダ（ガ）	〃	掘り込み	〃	〃	19	マヌフスカの隣	〃	〃	〃	〃
5	マイニングワガー	西塩汲原	〃	〃	〃	20	メージングワの隣	呉屋原	〃	〃	〃
6	タチミチ	〃	〃	放 置	〃	21	ンダトウマシチャの前	仲村渠	〃	〃	〃
7	シマンガ	西塩汲原	〃	埋 没	〃	22	アナガー	後村渠	自然流水	使用せず	〃
8	ジョーガー	塩汲原	〃	放 置	〃	23	テーラガー	大川原	〃	放 置	〃
9	ミーガー	〃	〃	〃	〃	24	ウッカガー	〃	ヒージャー	水田用水	〃
10	ティーダガー	〃	〃	枯 渴	〃	25	ヌンドウルチガー	仲村渠	自然流水	埋 没	〃
11	ナーカヌカー	塩汲原	〃	放 置	〃	26	イジュミングワ	佐久本原	自然流水	放 置	〃
12	ウガミヌカー	御嶽原	自然流水	埋 没	〃	27	キンタガー	東江村渠	ヒージャー	現在使用	〃
13	クブクジングワの前	西塩汲原	スンジャ	放 置	〃	28	カングワ	〃	掘り込み	使用せず	嘉陽層
14	アブントの隣	京村渠	〃	使用せず	石灰岩	29	サーガ	福花原	ヒージャー	現在使用	石灰岩
15	アタイの前	〃	〃	埋 没	〃	30	クーランチャヌモーイジュミ	〃	自然流水	〃	〃
						31	タキシヌイジュミングワ	田慶志原	〃	使用せず	〃

金武区誌・並里区誌合同調査 平成5年6月(参照)







地図 4
伊芸のカー(戦前)

- 道路わきの水道
- 個人の井戸
- カー
- 川
- 導水管
- サータヤー
- 小字界
- ウタキ

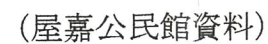
● 伊芸区個人の井戸

No.	屋 号	名 前	地 番	No.	屋 号	名 前	地 番
1	亀山里	伊芸仁男	107-2	8	安田	安富祖健	61
2	前下小	小波津進	95	9	登川	登川松栄	60
3	本部	池原 藤	35	10	島袋	金城久彦	72
4	大川小	池原トミ	22	11	前本部小	池原新俊	74
5	新島	J A	19-1	12	高里	登川松栄	82
6	久保	仲間義雄	17	13	瑞慶村	瑞慶村智廣	55
7	安富祖安田	安富祖肇	39	14	津嘉山	津嘉山スミ	52

● 伊芸区道路わきの水道

No.	屋 号	名 前	地 番	No.	屋 号	名 前	地 番
1	カナシチャ小	上江洲耕昇	123	7	前本部	池原 藤	94
2	前山里	宜野座弘光	98	8	島袋	金城久彦	72
3	武太山里		132	9		伊芸勇光	15
4	ウカイ		24	10	瑞慶村	瑞慶村智廣	55
5	旧区事務所		33	11	新島小	新島博文	50
6	本部	池原 藤	35	12	西登川	山城美代	893

「この地図は、国土地理院長の承認を得て、
同院の発行の5千分の1国土基本図を使用したものである。
(承認番号 平14沖複、第28号)」



9. 調査を終えて

調査は構想し、構成し展開していくものである（仮説の設定及び検証）。

構想し構成するにはそのための予備的な知識がなければならない。

本調査の予備的・先行的な知識は平成5年の「金武・並里のカーの合同調査」であり、わたくし自身の持っている沖縄における一般的な石灰岩地域の湧水に関する知識であり、ウッカガー、キンタガー、サーガなどの並里の井泉における体験や見聞であった。

調査を終えてみて、それぞれの地域でそれぞれの特徴のあることがわかった。

中川ではナコーガ（ウルンガー）などの流れる川も生活用水として使っていた。

金武区のソンドカリ（嘉陽層）の地域の谷筋の取水のあり方は石灰岩の地域とは違う特徴をもっている。いわゆる谷筋を人工的に掘ったカーである。

伊芸と屋嘉は浜堤に立地する集落であり、集落の東と西両サイドに川が流れており、生活用水としてそれも利用していた。

並里のカーは典型的な石灰岩地域のカーである。ドリーネの底や石灰岩の辺縁の低地から湧出する。水量が豊富で、一つのターブクワ（田袋）を涵養するほどであった。

調査は人生のようなものである。山あり谷あり平野あり、雨や嵐、べた風もあり、時には方向を失い、脈絡を失い不安におそわれ遭難しそうになることがある。

そのような時、調査の目的や方向、方法など調査の基本にかえって、現在自分自身がどの位置にいるかを知ることでもある。

また関連するデータ・書物に目を通すことも必要である。

そのようにしてデータが積み上げられていく。

この調査を進める間に、かつて調査され役場に保存されていた資料が探せなくて利用できない状況が出てきている（廃棄されたのか、整理の状態がわるいのか）。記録保存が叫ばれ、アーカイブスの必要性が論じられ地域によっては自治体独自で公文書館を開設し、あるいはその準備を進めている所もある。

現在我々はそのような時代にいる。

日常の行政事務の中で作成されていく文書は、その行政的役割（保存年限）が終れば廃棄できるようになっている。

文書資料の歴史資料としての役割は、行政資料の役割が終わった時から始まる。

長い時間の経過でみれば町職員の仕事は、「歴史資料」―それが保存できれば一の生産を日々行っていることになる。

金武町の地域史（誌）の編集作業の過程で、地域の文書（文献）資料の少なさに愕然としたものである。

本町にあっては行政の足跡としての資（史）料を是非後世に遺し、この地域に豊かな文化の気風を育てていきたいものである。

池 原 隆

参考文献

- 『国土基本図』国土地理院・昭和56年
- 『金武町誌』金武町役場・昭和58年
- 『並里区誌 戦前編』並里区事務所・平成10年3月
- 『金武区誌 戦前編』金武区事務所・平成6年3月
- 『村の記録』安富祖一博・昭和58年10月15日
- 『並里写真集』並里区事務所・平成13年3月10日
- 『金武町史（戦争編）』金武町教育委員会・2002年3月31日
- 『金武町の村落と聖地』—伊芸区の場合—
金武町教育委員会・平成3年3月30日
- 『金武町の村落と聖地』—屋嘉区の場合—
金武町教育委員会・平成4年12月30日
- 『金武町の村落と聖地』—金武区と並里区の場合—
金武町教育委員会・平成6年12月20日
- 『琉球国由来記』伊波・東恩納・横山編 風土記社 昭和63年
- 『土地分類図（沖縄県）』国土庁土地局・昭和52年
- 『南島村内法』奥野彦六郎 1977年

□ 調査員及び資料整理員（敬称略）

池原 隆（金武町文化財保護審議会会長）

知名達也（金武町文化財保護審議会委員）

宮里安秀・徳吉真理乃・池原尚美・石川恵子

（金武町教育委員会職員、嘱託、臨時）

金武町文化財調査報告書 第2集

金武町の井泉

—水をめぐる人々のくらし—

発行 金武町教育委員会

2003年8月

〒904-1201

金武町字金武4380番地

電話 098-968-5277

印刷 新たいよう印刷
恩納村字恩納6332番地
電話 098-966-8600

表紙絵・石川清武

